



TITLE:

雜録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜録. 日本外科宝函 1929, 6(5): 1417-1420

ISSUE DATE:

1929-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200395>

RIGHT:

## 雜 錄

### 第八回國際外科學會參列記事(第一回報告)

昭和四年七月二十五日—二十六日

ワルシヨウニテ 鳥 瀉 隆 三

第八回國際外科學會ハ七月二十二日ニ始マリ本日ヲ以テ終ラ告ゲマシタ。詳細ハ追ツテ報道スルツモリデアリマスガ七月二十四日午前中ニ總會ノ相談デ決定ニナツタ主要ナコトヲ取敢ヘズ通信致シマス。

一、次回(第九回一九三二年) 開會地 スペイン國マドリツド市

二、次回會長 Dr. J. Lorthioir (Bruxelles) ロルチオアル氏(ブラツセル)

副會長 Prof. Dr. De Quervain (Bern) ドウケルバン氏(ベルン)

三、次回宿題

第一、脊椎管内腫瘍ノ診斷及ビ治療

*Diagnostic et traitement des tumeurs intra-rachidiennes*

第二、非結核性肺膿瘍

*Suppuration pulmonaire non tuberculeuse*

第三、食道ノ外科

## Chirurgie de l'oesophage 以上

以上ノ事ヲ本日此地ヨリ大至急ニ日本ノ外科學界(學會ニ非ズ)へ御報知致ス理由ハ左ノ通りデアリマス。

不肖(鳥瀉)ガ日本ノ代表トシテ第八回國際外科學會へ出席スルコトニ確定シタノハ昭和四年四月(ノ末頃?)デアリマシタ。コレハ開會ノ三ヶ月位前デ演說申込ミヤ原稿發送等ノ期限ヲ經過スルコト一年デ學術上何一ツ持出スコトノ出來ヌ様ニナツテシマツタ後デシタ。

此ノ様ナコトデハ日本ノ代表トシテ出席シテモ大シタ意味ヲ爲サヌト考ヘラレマスカラ、ソレデ今度ハ開會地ト宿題トヲ一日モ早ク日本外科學界へ報道シテ此ノ條件ニ適合シタ最モ好イ代表者ヲ早速ニ選定シタ方ガ宜シカラント考ヘタカラデアリマス。コレハ昭和五年四月ニ大阪市デ開會サレル日本外科學會ヲ利用シテソノ時ニ第九回國際外科學會へ出席スル代表者ヲ決定スルト言フ様ナ『手ノロキ』事ヲセズニ一日モ早ク確定シタ方ガヨロシクハナイカト不肖ハ考ヘマス。ソレデナイト日本國家ガ代表者ヲ派遣スル意味ヲナサスカノ様ニ存ジマス。

ソレカラ從來ノ經過デハ年齡ノ高イ者ノ中カラ代表者ヲ選定スル慣例ニナリカケテ居ル様デスガ矢張り宿題ニ就テ物ヲ言フコトノ出來ル事實ヲ握ツテイル人物ヲ擇ンデ代表者ニシタ方ガ意義ガアルカノ様ニ考ヘマス。

ドノ様ナ形式デ代表者ヲ選定スベキカニ就テハ日本外科學界ノ諸君ニ御意見モアリマセウガ、不肖ノ愚見デハ日本外科學會ノ評議員諸君ガ次回宿題ト日本外科學者ノ顔ブレトヲヨク見合セテ先ヅ三名ナリ五名ナリヲ選舉シ、更ニ其中カラ正副一名宛ヲ選定シ(正ニ差支ヘ起ツタ時ノ副)タラバ如何カト考ヘマス。一堂ニ評議員ガ集合シナクテモ此ノ様ナ選舉ハ出來ルナラント考ヘマス。コレハ凡テ御參考迄ニ申上ゲマス、トニカク早ク次回ノ代表者ヲ選定シテ今カラ十分ニ準備ヲシテ貰フコトガ必要カト考ヘマス。(完)

## 故伊藤先生ノ思出デ話

昭和四年八月三十日

瑞西國ベルン滞在中 烏 鴻 隆 三

外科寶函七月號が四五日前ニ伯林カラ廻送サレタ。異境デ寶函ヲ觀ルト誠ニ樂シイ。雜報ノ部ニ佐藤剛藏氏ノ故伊藤先生ノ思出デ話ガ出テ居ル。昔ハ全ク此通りデアツタ、京大外科創設ノ際デ赴任ハ嚴命デ返答ハ即座ニカ或ハ長クテ翌早朝マデ、大抵十八時間内外ニ限ラレテ居ツタ。モシ間違ツテ返答ヲセズ一手術場ニデモ出テ居ルト先生ハ「アンタ往クンデスヨ」ト言ハレルキリデ後ハ一切取合ハナカツタ。此ノ御蔭デ朝鮮デモ滿洲デモ到ル處ニ同窓ノ人ニ會フ事ガ出來ル。ソレデ此等ノ同窓ハ各地ニ固定シテ立派ニ其地方ノ第一人者トナツテ居ル。長春ノ塚本良禎氏、ハルビンノ増田貞一氏何レモソレデアル。滿鮮ニ來テ見ルト「先人苦心ノ後ヲ失墜シテハナラヌ」ト言フ感ガ特ニ深クナル。

赴任ノ事デ思ヒ出スガ自分ガ外科教室ノ助手トナツテ猪子、伊藤兩先生ノ指南ヲ受ケテ約二ケ年モ經過シタ頃デアツタカト思フ、或ル早朝自分ガ圖書室デ書物ヲサガシテ居ルト階段ヲ昇リ廊下ヲ急ギ足デヤツテ來ルノガ聞エル。「伊藤先生ダナ」ト自分ハ思ツタ。此處デ一寸横道ヘ這入ルガ此ノ歩キ方ハ後ニ副島豫四郎氏ヲ感化シテ、先生デアアルカ或ハ副島氏デアアルカノ判斷ガ困難ニナツタ。聽診器ノ振り工合カラ「エー、エー」ト言フ返事ノ仕方マデ副島氏ハスツカリ伊藤先生其儘デアツタ。丁度加藤甚七氏が猪子先生ト全ク同ジ咳拂

ヒノ仕方ヲスルノト同ジ事デアル。此ノ兩氏ハ此點ニ就テダケデモ益々加餐スベキデアロウ。ワルレンスタイン部下ノ將卒ガ唾キノ吐キ方迄大將ニ似セタト「ドラマ」デ讀ンダガ古今東西同ジ事デアル。先生ハ扉ヲ排シテ入ツテ來ラレルヤ否ヤ自分ニ接近シテ「エー、アンタ、新鴻ヘ往ツテ呉レマセンカ」ト言ハレタ。見レバ手ニハ「メートル」モアルカト思ハレル位長イ巻紙ノ手紙ヲ擴ゲタ儘デ持ツテ居ラレタ。新鴻ハ今ニ大學ニナルト言フ事ヤ洋行ノ事ヤ待遇ノ事ナドヲ話サレタ様ニ思フ。自分ハソシナ事ハ耳ニモ容レズ下ノ様ニ答ヘタ。「大阪カラモ交渉ガアリマシタガ私ハスグ斷リマシタ」。先生ハ一寸驚カレタ様子デ「ソレハ何日頃デスカ」ト尋ネラレタ。「遂ヒ四五日前デシタガ、先生ニ御相談スル迄モ無イト考ヘテ、私一存デ斷ツテ了イマシタ」。先生ハ「ソレハ惜イ事ヲシマシタ、アンタ大阪モ斷ツタノデスカ……」ト言ハレテソレナリ室ヲ出テ行カレタ。先生ハ明察ガ早イカラ此ノ様ナ場合ニモアツサリシテ居ラレル。ソレデ自分ハ新鴻行キテ無難ニ免レタ。新鴻ヘハ誰ガ往ツタカ知ラヌガ大阪ヘハ瀬尾ト言フ人ガ東大カラ赴任シタ。

ソレカラ其歳ノ末ニ自分ハ先生ノ差支ヘノ無イ時刻ヲ問合セ先生ノ御宅ヘ參ツテ研究ヲ指導セラレタキ旨ヲ懇願ニ及ンダ。ソレデ痔核ノ「デーマ」ヲ貰ツテ研究方針ヲ授ケラレテ研究ニ没頭シタ。人ノ顔サヘ見レバスグー「ヨイデーマ」ガアルカラ自分ノ教室ヘ這入ラヌカ「ト勸誘シタリ、廊下デ通り掛リニ路連レ一ナツタ教授ニ向ツテ「何カヤラセテ下サイ」ナド言ツテ研究ヲ始メルト言フ様ナコトハ此ノ時代ニハ無カツタ様ニ思フ。三年許リ經過シテ論文ガ始メテ獨逸外科學雜誌ヘ掲載サレタ。原稿ノ添削ニハ隨分先生ヲ煩シタ様ニ思

フ、先生ノ筆ノ加ハツタモノハ全部製本シテ保存シテアル。當時自分ノ手寫シタ業績ハ猪子先生ニモ差上ゲタ。昔ハ此様ナ風デアツタ。其後大阪ニ赤十字病院ガ出來ルコトニナリ、ソレハ是非共京大カラ人が往カネバナラヌト言フノデ今ノ市川教授ヤ自分等ガ京大ノ發展ノ爲トアツテ否應無シニ赴任シタ(コレカラ後ノコトハ餘リ長クナル故今回ハコレデ止メル)。

自分ガ最初抑モベルンニ到着シタノハ一九一二年十二月中旬頃デ長谷川房英氏ガ停車場迄出迎ヘテ呉レタ。時々ソレヲ思ヒ出ス。コレハツマリ伊藤先生ガ此地デ勉強サレタ緣故デソレガ自分ヲモ此地ヘ引寄せタノデアル。當時生理學ノ教授ハクロネツケルデソレハ伊藤先生ノ指導教授デアツタ。教室ニハ棲ミ込ミノ老小使ガ居ツテ伊藤先生ニ就テ種々ナコトヲ話シテ呉レタ。試験動物ハ大抵先生自身下宿ヘ運搬シテ下宿ニ置クコトガ多カッタラシイ、非常ナ勉強デ

## 會 報

### 入 會 者

篠原 一幸 北海道帝大醫學部西川外科  
高橋 源二 宮城縣石卷町日本赤十字社宮城支部病院外科  
石川 昇 金澤醫科大學外科教室  
轉居者  
伊藤 清 靜岡縣濱松市鴨江町縣立鴨江病院  
内海 航三 和歌山縣新宮町内海醫院  
松本 彰 大連市山城町五ノ二

アツタコトハ小使モ驚嘆シテ居ツタ。小使ト言ツテモ日本ノトハ異リ一定ノ教育モ受ケ一見立派ナ紳士デアル。當時其人ノ話ニハプロフェツサー伊藤ハ時々アール(ベルン市ヲ流レル河)デ小魚ヲ釣ツテ來テソレヲ「フライ」ニシテ食ベルノガ好キデアツタトノ事デアル。

今度自分ハワルシヨウノ外科學會ガ濟ンデカラ直グニ教室業績原稿ヲ持ツテ此地ヘ來タ。十七年前ニハ無カツタ自動車ガ眼ニ着ク位デ其ノ他ハ殆ンド變リガ無イ。ベルン市内ヤ近郊ハ大阪ヤ京都ヨリモ自分ハ詳シク知ツテ居ル。アールノ河岸ヲ散步スルト例ノ通り彼方此方一釣ヲ垂レテ居ル人ヲ見ル。「先生モコレヲヤラレタナ」ト思ヒナガラ通ル。今ハ併シ當年ノ人ハ皆悉ク此世ヲ辭シテ居ル。星移リ物變リ山容水態ノミ舊ノ如クナルニ對シテ非常ニ寂漠ヲ感ズル。先生ハモ少シ生キテ居ラレテホシカツタ。

### 五 郎 川 正 己

荒木 千里 宇部市沖ノ山同仁病院  
賀來 隆美 宇和島市立病院外科  
北浦 保憲 京都帝大醫學部外科  
高巢 三四一 奉天滿洲醫科大學外科教室  
青木 市次郎 岩手縣和賀郡黑澤尻町和賀病院外科  
村上 省三 大阪市東區大阪陸軍被服支廠  
澤田 文治 愛媛縣西字和郡三瓶町朝立  
富山縣戶出町